

第一問 左は、村田純一『技術の哲学』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

現代では技術は哲学にとって最重要の課題のひとつになっているといっても過言ではない。

にもかかわらず、二〇世紀から現在に至るまでの哲学の専門分野内での議論を見る限り、技術は中心的问题として扱われてきたとはとてもいいがたいように思われる。二〇世紀の末になってようやく技術をテーマにする多くの著作が出版されるようになったが、それらの著作では、その最初に、技術が哲学の分野で取り上げられるようになったのは、つい最近であるといった表現が、枕詞のようにして使われることが多かった。特に、技術と密接に関係があると思われる科学に関する哲学的探究を担ったはずの「科学哲学」の分野で技術についての議論がほとんど見られなかった点は今から考えると奇妙といってもおかしくないだろう。それでは、どのような技術に関する見方が、哲学者たちに対して、技術を魅力的課題と見なすことを妨げたのだろうか。どのような技術理解のあり方が支配的だったために、技術軽視が導かれたのだろうか。

(1) 技術の過小評価

以上の問いに対する最も単純な答えとしては、ギリシャ以来の西欧哲学の伝統では、理論哲学の分野でも、実践哲学の分野でも、^A技術を過小評価するような技術理解の仕方が支配的だったからだ、というものが考えられる。

理論哲学のなかでは、技術はあくまで理論的知識の応用と見なされ、したがって、その認知内容はもっぱら理論に求められることになる。とりわけ近代技術においてはこの理論内容を形成するのは科学であると見なされる。そして、技術は科学の応用であるというこの見方によって、近代技術は勘や熟練に依存する伝統技術から明確に区別することができると考えられる。こうした見方が受け入れられている限り、少なくとも理論哲学の範囲では、技術特有の認知的性格に光が当てられることは少なく、技

術の役割はもっぱら「応用」という二次的、副次的な機能に求められることになる。

しかもこの見方は、現代では何も哲学者の専^⑦バイ特許ではなく、むしろ、技術者も含めてかなり一般に受け入れられている。ほとんどの国語辞典には、技術の意味として「科学の応用」という解説が載っている。

他方、実践哲学の範囲では、今度は手段と目的というよく知られた概念対によって技術はやはり二次的な役割を与えられることになる。実際、実践哲学、とりわけ倫理学において問われるのは、行為がどのような目的（例えば、殺人か人助けか）に関係しているかであり、その目的を達するためにどのような手段を選ぶか（刃物を用いるか拳銃を用いるか）は、行為の善悪を判断するうえで、無関係ではないにしても、あくまでも二次的なものと見なされる。

この見方もまた、哲学内部のみならず広く一般に受け入れられている見方に根をもっているように思われる。例えば、次の発言は、技術は目的とは独立な中立的手段に関する事柄であることを見事に表現している。

技術はお勝手^{〔注〕}の包丁と同じだよ。奥さんが使えばおいしい料理ができるが、強盗に持たせれば人が死ぬ。（本田宗一郎『新装・得手に帆あげて』わせた書房、一九八四年、一八頁。飯田賢一『二語の辞典・技術』三省堂、一九九五年、五頁より）

以上のように、「科学の応用としての技術」、そして、「中立的手段としての技術」、こうした日常的な見方にまで根を張っている見方が自明視されることによって、理論哲学の範囲でも、実践哲学の範囲でも、技術はあくまでも二次的、副次的位置に甘んじることになる。

たしかに、このような見方は、西欧の伝統として、あるいは、今では一種の常識として、技術理解の基本を形成している。しかしながら、他方で、この^Bような見方が単純すぎることに、あるいは、はつきりと間違っていることもまた、すでに繰り返し指摘されてきたことである。

技術史家たちは、

C1

という見方が、どれほど一面的な見方であるかを繰り返し指摘してきた。例えば、産業革命

を牽引^{けんいん}した蒸気機関の技術は科学理論を前提にして成立したわけではなく、D1 逆に、カルノー^{注2}による熱力学の理論のほうが蒸気機関のような技術を前提にして成立したものであることは、ほとんどすべての技術史の教科書に記載されている。歴史的に見るなら、技術は科学の応用であるところか、技術が科学を生み出す場合もあるのである。もちろん、二〇世紀以降、特に現代では、科学理論をもとにして技術の開発が進められることは多々あるが、少なくとも、科学と技術の関係を一般的に考える場合、どちらか一方を先行するものと見なすわけにはいかないのである。

それでは、C2 という見方はどうか。これに対しては、わたしたちの「常識」^①のなかに反証例を見いだすことができる。例えば、アメリカの全米ライフル協会（NRA）は、銃規制に反対する論^①キョとして、「銃が人を殺すのではなく、人が人を殺すのだ」というスローガンをD2 用いている。しかし、多くの日本人びとは、銃規制を行っている現在の日本の法制度に反対していないことをかんがみれば、この主張、つまり、銃という技術的人工物は中立的な手段であるという主張に説得力があるとは考えていないといえるだろう。言い換えると、銃をもった人間、あるいは、銃を放置している社会は、銃をもたない人間や社会とは根本的に異なっていると考えているのである（もっと大規模な例は、核兵器である）。

もし技術^Eについての伝統的、常識的な見方が間違っているとするなら、あるいは、少なくとも一面的であるとするなら、そしてまた、もし哲学者たちがこのような見方にもとづいて、技術を二次的、副次的問題と見なし続けてきたとするなら、それは哲学者たちのタイ慢^②以外の何ものでもないだろう。

（2）技術の過大評価

もともと、二〇世紀の哲学者たちがみな技術を軽視していたわけではない。何人かの哲学者は、ここで取り上げたような伝統的な見方を根本的に批判して、技術を哲学の中心に据えた。ヤスパースやハイデガー、あるいは、ホルクハイマー、アドルノ、そしてマルクーゼなどがよく知られている。これらの論者は、近代技術を現代の文明を決定的に支配する重要な役割を演じているものとして、それぞれの哲学的枠組みのなかで中心的な位置に据えた。ここではハイデガー（1889-1976）を取り上げてみよう。

う。

ハイデガーは、「技術とは何だろうか」という有名な短い論考をはじめとする諸論考のなかで、技術が科学の応用であるという見方や、技術は中立的手段にかかわる事柄であるといった、「人間学的」、「道具主義的」見方を批判し、技術はむしろ世界の現れ方を根本的に形成する要因であること、あるいは、存在理解の基本を形成する要因であることを強調した。

こうした点でハイデガーは、近代世界のなかでの技術の重要な役割を鋭く見抜き、技術を哲学、問題に据えた功績をもっている。しかしそれでは、ハイデガーはこのような技術に関する存在論的な位置づけにもとづいて、具体的な技術現象や技術に関連する諸問題を哲学的分析の主題として取り上げ、積極的な形で技術に関する哲学的ないし倫理的な分析を展開したのかといえ、必ずしもそうはいえないだろう。

ハイデガーによれば、古典的な技術、とりわけギリシャ時代の技術は、自然や文化の価値体系のなかに埋め込まれたものとして理解されていたが、近代以降、なかでも現代における文明や文化においては、いかなる部分も技術的合理性の支配下にあるため、技術に関係しない「外部」は存在せず、すべてが技術的に処理されるようになっていっていると見なされる。したがって現代では、技術を社会的、政治的、あるいは、倫理的に制御することは不可能な試みだということになる。ハイデガーは、この点を別の著作のなかではあるが、次のように述べている。

いかなる個人も、いかなる人間の集団も、きわめて有力な政治家や研究者や技術者をメンバーとするいかなる委員会も、経済界や工業界の指導的人物たちのいかなる会議も、原子力時代の歴史的進行にブレーキをかけたり、方向づけたりすることはできません。たんに人間的な組織は、いかなる組織でも、時代に対する支配を自分のものにすることができないのです。

このハイデガーの発言に見られるのは、

C3

という見方、極端な形で「技術決定論」の見方である。この見方によれば、技術を批判し、変革しようとする人間のいかなる努力も無駄になり、まったく悲観的な見方に満足せざるをえなくなる

ように思われる。

もつとも、ハイデガー自身は、技術的合理性が支配してしまっている時代状況を必ずしも悲観的に見ているわけではない。むしろ、そうした一面的な世界の現れ方を「危機」と呼ぶと同時に、危機のなかから新たな仕方での技術とのかかわり方が生まれる可能性を示唆している。しかし残念ながらハイデガーは、例えば「技術とは何だろうか」の最後で、「私たちが危機に近づけば近づくほど、救いとなるものへと通ずる道はそれだけいつそう明るく輝き始める」と述べているように、わたしたちに技術の本質への問いを問い続けることを要^①セ^②イするのみで、具体的な技術現象を手がかりとして問いの方向を明示することを行っていないように思われる。

もしこのように見方が技術に関する哲学的思^Gサ^③クの最終的な帰結であるとすれば、それぞれの哲学者の概念枠組みのなかで技術の重要さは指摘されながら、結局はこの場合も、具体的な技術現象に即した形で技術に関する哲学的考察を見いだすことはできないことになってしまい、技術哲学は哲学のなかで積極的な位置を与えられることはないことになる。これが技術を過大評価することからの帰結である。

こうしてわたしたちがこれまで多くの哲学者のなかに見いだすのは、一方では技術に関する過小評価であり、他方では、ハイデガーのような過大評価である、ということになり、結局、伝統的な西欧哲学のなかには、技術現象をそれにふさわしい仕方を取り上げている見方を見いだすことはできないといってよいことになる。あるいは、技術をめぐる二〇世紀の社会の歩みと一般の人々の見方の変化を振り返ってみると、技術に対する過大評価と過小評価との揺れ動きのなかにあった、ということができるとを考慮すると、技術をめぐる哲学の現状は、技術に対して適切な距離をとることができなかったわたしたちの社会のあり方を端的に反映しているということもできる。こうした点から見ると、二〇世紀には、本来の意味での「技術哲学」はいまだ成立しえなかったといっても過言ではないことになる。というのも、世界ないし時代に対して適切な距離をとりうるような仕方では、問題とそれをとらえる概念装置を「批判的」に解明することこそが哲学の仕事のはずだからである。

しかしそれでは、技術現象をその現象にふさわしい仕方では批判的に問題にしうるような「技術哲学」はいかにして可能なのだろうか。

もしここで取り上げてきたこれまでの哲学のあり方に関する状況判断が正しいとすると、「技術の哲学」を可能にするためには、少なくともこれまでの哲学のなかで暗黙の前提になっていた既成の概念枠組みを前提するわけにはいかないことになる。むしろ、これまでの哲学の伝統自身をあらためて見直す必要が出てくる。

〔注〕

1 お勝手——キッチン、台所のこと

2 カルノー——一七九六—一八三二年。フランスの物理学者、数学者

3 存在論——事物の存在について考える哲学の一分野

問1 傍線部Aについて、その内容として最も適切なものを次から選べ。

1

- ① 技術の役割はもっぱら二次的、副次的な機能であるため、あくまで理論的知識の応用である
- ② 技術はあくまで理論的知識の応用であり、したがって、哲学者たちにとって魅力的な課題ではない
- ③ 技術はあくまで理論的知識の応用であり、また、目的に対して中立的な手段にとどまる副次的なものである
- ④ 技術は目的とは独立な中立的手段に関する事柄で、この考えは広く一般に受け入れられている
- ⑤ 技術は目的とは独立な中立的手段に関する事柄で、理論的知識の応用とは断定できない

問2 傍線部Bについて、なぜそういえるのか。最も適切なものを次から選べ。

2

① 一つの理由としては、先行する技術が新たな科学理論を生み出す場合もあるため、もう一つの理由は、最新の技術を用いなければ科学の発展を進めることが難しいためである

② 一つの理由としては、科学理論をもとにして技術の開発が進められることが多々あるため、もう一つの理由は、ある技術によって生じる社会問題が存在する以上、技術的人工物は中立的な手段ではないためである

③ 一つの理由としては、技術は常に科学に先行して新たな科学理論を生み出しているため、もう一つの理由は、ある技術によって生じる社会問題が存在する以上、技術的人工物は中立的な手段ではないためである

④ 一つの理由としては、先行する技術が新たな科学理論を生み出す場合もあるため、もう一つの理由は、ある技術によって生じる社会問題が存在する以上、技術的人工物は中立的な手段ではないためである

⑤ 一つの理由としては、どのような技術を選ぶかは行為の善悪を判断するうえで無関係ではないため、もう一つの理由は、技術によって新たな科学理論が生み出されることはあり得ないためである

問3

空欄C1からC3には次のaからcのいずれかが入る。その順番として、最も適切なものを次から選べ。

3

- a 技術は「中立的な手段」に関する事柄である
- b 技術的合理性が社会のあらゆる領域の進み方を方向づける
- c 技術は科学の応用である

C1 C2 C3

① a | b | c

② a | c | b

③ b | a | c

④ c | a | b

⑤ c | b | a

問4

空欄D1からD3に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。

4

D1 D2 D3

① むしろ しきりに とりわけ

② あるいは とはいえ しきりに

③ むしろ あるいは ところで

④ よって すなわち とりわけ

⑤ よって しきりに したがって

問5 傍線部Eについて、その見方に含まれる内容として、明らかに適切ではないものを次から選べ。

5

- ① 技術は目的とは独立な中立的手段に関する事柄である
- ② 近代技術においては、その理論内容を形成するのは科学である
- ③ 技術は科学の応用であるという見方によって、近代技術は伝統技術から明確に区別することができる
- ④ 銃を放置している社会は、銃をもたない人間や社会とは根本的に異なっている
- ⑤ 技術の開発は、科学理論をもとにして進められる

問6 傍線部Fについて、ハイデガーの主張として、最も適切なものを次から選べ。

6

- ① 古典的な技術は、自然に対抗して従来の文化を変える存在であると理解されてきたが、近代以降においては、世界のいかなる部分も技術的合理性に支配されている
- ② 古典的な技術は、自然現象同様に人の理解を超えた存在として理解されていたが、近代世界のなかでは技術を適切に理解するための哲学的ないし倫理学的分析が展開された
- ③ 古典的な技術は、自然や文化の価値体系のなかに埋もれたものとして理解されていたが、現代の文化や文明において技術は重要な役割を担っており、あらゆる哲学者の分析の主題として取り上げられるようになった
- ④ 古典的な技術は、自然や文化の価値体系のなかに埋め込まれたものとして理解されていたが、近代以降においては、積極的な形で技術に関する哲学的ないし倫理学的分析が展開されるようになっていく
- ⑤ 古典的な技術は、自然や文化の価値体系の一部として理解されていたが、現代においては、世界全体が技術的合理性の支配下にあるため、すべてが技術的に処理されるようになっていく

問7

傍線部Gについて、これはどういう意味か。最も適切なものを次から選べ。

7

- ① 技術を社会的、政治的、あるいは、倫理的に制御することは不可能な試みではないものの、有力な政治家や研究者や技術者が分野を超えて結集して制御する必要があるということ
- ② 現代社会は、すべてが技術的合理性の支配下にあるため、技術を社会的、政治的、あるいは、倫理的に制御することは不可能だが、そもそも技術とは何なのかを問い続ける必要があるということ
- ③ 現代社会は、すべてが技術的合理性の支配下にあるため、技術を社会的、政治的、あるいは、倫理的に制御することは不可能だが、その状況に満足せざるをえないということ
- ④ 技術を社会的、政治的、あるいは、倫理的に制御することは不可能な試みではないものの、技術を批判し、変革しようとする人間のいかなる努力も無駄になるであろうということ
- ⑤ 技術を社会的、政治的、あるいは、倫理的に制御することは不可能な試みだが、具体的な技術現象を手がかりとして問いの方向を見いだすことが重要であるということ

問 8 筆者の結論と合致するものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

8

① 技術をめぐる二〇世紀の社会の歩みと一般の人々の見方は、技術に対する過大評価に偏っており、哲学はこれまでのあり方に関する状況判断をすべきである

② 技術をめぐる二〇世紀の社会の歩みと一般の人々の見方は、もっぱら技術を過小評価する傾向にあり、一方哲学は、技術を過大評価することに終始してしまっている

③ 技術をめぐる二〇世紀の社会の歩みと一般の人々の見方は、技術に対する過大評価と過小評価との揺れ動きのなかに入り、哲学もまた、技術現象をその現象にふさわしい仕方では批判的に問題にすることが十分にできていない

④ 技術をめぐる二〇世紀の社会の歩みと一般の人々の見方は、技術に対する過大評価と過小評価との揺れ動きのなかに入り、一方哲学は、技術に対して適切な距離をとってきた

⑤ 技術をめぐる二〇世紀の社会の歩みと一般の人々の見方は、技術に対する過大評価に偏っており、一方哲学は、技術を過小評価する傾向がみられる

問9 文中の二重傍線部⑦から⑭のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを次から選べ。

9

⑦ 専|バイ|特許

① バイ|審員制度

② バイ|名行為

③ 触|バイ|を加える

④ 細胞を|バイ|養する

⑤ 固定客を|バイ|増させる

10

⑩ 論|キヨ|

① 群|雄割|キヨ|

② キヨ|諾を得る

③ キヨ|手をする

④ キヨ|匠の代表作

⑤ キヨ|飾の美

11

⑭ 太|タイ|慢

① 太|タイ|度を改める

② 進|タイ|窮まる

③ 期|タイ|に応える

④ 新陳|タイ|謝

⑤ 勤|タイ|管理

12

⑪ 要|セイ|

① 成|セイ|行きを|セイ|観する

② 選|手宣|セイ|

③ セイ|止を振り切る

④ 申|セイ|を受理する

⑤ セイ|実な態度

13

⑯ 思|サク|

① 政|サク|を決める

② 試|サク|品を見せる

③ サク|引を見る

④ 文章を添|サク|する

⑤ 時|代|サク|誤

第二問

左は、永井玲衣「ずっとそうだった」（『水中の哲学者たち』所収）の全文である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

「親戚が好きになれない」。ある哲学対話^{〔注〕}で、参加者のひとりが言った。

家のさまざまなしがらみ、習慣、伝統などを受け継いでいかなければならないために、彼はしばしば親戚と集まらざるを得ないという。それでも、親戚が好きになれないと苦笑しながら話す。

墓を守るとはどういうことか、というテーマだった気がするが、あまり覚えていない。参加者はほとんどが初対面で、わたしにとっては見慣れぬ土地での哲学対話だった。それぞれの墓の守り方が紹介され、吟味され、議論される。どうすべきか、という建設的で解決に向かうような対話ではなく、むしろそれぞれが見ようとしていなかった自身の前提や欲求を丁寧^{ひも}に紐解いていくような時間だった。

2時間ほどの時間だったが、親戚が好きになれないと話した彼は、長い時間をかけて何度もそのことについて繰り返した。まるで親戚が嫌いな自分を罰するかのようだった。

対話も終^⑦バンに差し掛かった頃、ずっと黙っていた参加者のひとりである中学生の女の子が、不思議そうに男性の顔を見上げ、こう言った。

「別に嫌いなら嫌いでいいんじゃないですか」

この意見自体、そこまで斬新で、奇抜で、解決を与えてくれるような考えというわけではない。「親戚 嫌い」などとゲゲレ^{〔注〕}ば出てきそうな意見でもある。

だが、彼女の意見は、主張というよりは「問い」だった。嫌いなら嫌いでいいのに、なぜそうしないのですか。なぜそう思う

のですか。何があなたをせき止めるのですか。

問いを受け止めた彼は、しばらく絶句し「そうか」とだけ言った。彼は彼女の問いをひとりで反芻はんすうしているようだった。誰かが手を挙げ、またぬるぬると対話が再開される。わたしたちは対話の海を彷徨さまよって、何かを探しに行く。だが、残念ながら時間がきて、対話はトウ突①に終わる。ハイみなさんそれでは陸に上がりましょう、とでもいうように、わたしはハイ終わりです、と

B

対話を終わらせる。

皆が帰る準備をもくもくと始めたとき、絶句していた男性が「今日、本当に来てよかった」と言った。「そうか、嫌いでいいんですね、あなたにそう言ってもらえてよかった、そうか」。少いうつむいて、緊張がほどけたように彼は笑い、どうもありがとう、と言った。お礼を言われた中学生は、やっぱり不思議そうな顔をして、黙ってそれを聞いた。

まったく別の日、まったく別の場所での、哲学対話でのこと。ある小学校の、何回目かの授業だった。彼らはもうすっかり哲学に慣れて、楽しみながら対話に参加することができる。その日のテーマは、彼らがやりたいと出してくれた「おとなとこどもの違いは？」に決まった。わたしの班は8人ほどのメンバーで、初回授業から説明や対話の途中で茶々を入れてくる男の子が入っていた。他の子が話している途中も、邪魔をしたり茶化したりしてなかなか場が集中しない。とはいえ、小学校ではよくある風景だから、なんとか仲裁しながら、哲学を子どもたちと楽しんだ。

だが、対話が始まってしばらくした頃、彼は誰かが話しているのを遮って、体をぐねぐねと動かし、両手をせわしくこすり合わせながら、目を細めてわたしにこう言った。

「本当は答え知ってるんでしょ」

答え、というのは、今回のテーマである「おとなとこどもの違いは？」に対する答えだろう。わたしの班では、年齢で決まる

とか、お酒が飲めるとか、お金が稼げるとか、その違いをはかろうといろいろな意見が出ていた。彼は、あえてわたしの神経を逆なでしようと努めているような仕草で、大げさにうんうん、とうなずきながらつぶつけてこう言った。

「いいんだよ、はやく言つて。言っちゃいなよ、答え！」

彼は C と笑っていた。わたしに手を差し伸べ、答えを促している。どうぞ、とでも言いたげな表情だ。

わたしはそれを見て、ほんとうに、泣きたくなったのだった。

毎回の哲学対話の説明で、わたしは何度も「答えをまだ誰も知らない、もしくはわかったふりをしているだけかもしれない」と強調していた。だからこそみんな考えを出しあつて、吟味するのだ、と言った。わたしも、先生も、おとうさんも、校長先生だって、この答えがわからない。だから「正解」を答えようとしなくていい、まずは考えを教えてほしい、そう説明していた。子どもたちはそれをよく聞いていたし、彼がわたしに答えを求めたとき、他の子どもたちは「先生だってわからないつってんじゃない」などと介入してくれた。

だからその場ではもう一度、彼に向かつて、彼一人だけに向かつて、その説明を繰り返した。じゃなきゃわざわざみんなで考えないんだよ、わたしもわからなくて知りたいから、協力してほしい、と心の底からお願ひした。彼はふん、と小さく息を吐いて何度かまばたきをした。別の誰かがはい！ と手を挙げて、ぬるぬると対話が再開した。

対話が終わったあとも、彼の言葉がわたしの中で反響している。彼にあつたのは、深い絶望だった。常に誰かの答えがあり、それを問われるだけという学校生活や彼の日常。後になって、彼が難しい環境にいることもほんの少しだけ知った。彼は最初の授業から、わたしたちを困らせる子どもで、そして困っている子どもだった。

考える授業っていったって、どうせ答えがあるのだろう。考える授業じゃなくて、答えさせる授業なんだろう。そういうもの

で、ずっとそうで、これからもそうだろう。

ああ、わたしもそういう子どもだった、と帰り道を歩きながら思い出す。そういうものだ、ずっとそうだった、これからもそうだろう。ぬるい倦怠感^{けんたいかん}と、確かな絶望感だ。人生の主体がわたしではなく、何か大なるものに奪い取られているような感覚。風は冷たく、帰り道は遠い。

横断歩道に立つと、向かいに見える寒そうなひとの群れが気怠^{けだる}げに口を動かしている。彼らの表情は見えない。黒いコートがずらりと並んでいる。

^E そういうものだ、ずっとそうだった、これからもそうだろう。

彼らは革靴を鳴らし、声を合わせながらどこかに歩いていく。

哲学対話は、日本だけでなく全世界で行われている。

学校などで行われる子どもとの哲学は、哲学対話という名前よりも「P4C (Philosophy for Children)」という名称のほうが一般的だ。ハワイ、オーストラリアなどの実践が有名だが、わたしはラテンアメリカでの実践が好きだ。ブラジルで活躍するウォルター・コーハンという哲学者は、子どもの哲学の実践の動機として、ラテンアメリカの「貧しくて公正さを欠いた社会」で、ひとびとが「みじめさの感情」を感じられなくなっているということを挙げている。大人は公平さのない世界につぶやく。

「ずっといいものだ (That's the way it is)」 「ずっとそうだった (It has always been like this)」と。

だからこそ、コーハンは子どもたちにまなざしを向ける。受け身で無抵抗で、生暖かい倦怠感の中で絶望し切らないように。自分たちの生きている環境に対して「問う」ことができるように。彼はスラム街の小学校で、子どもとともに哲学する。「自分たちの生きている世界がほかでもありえたたくさんの可能性のなかの一つにすぎず、それゆえ自分たちの世界は自分たちで変革することも可能だと気づかせる」ために。

地道で静かでありながら、最もラディカルな彼の試みを、わたしは愛している。

「嫌いでもいいんじゃないですか？」と問われた男性のように、わたしも見知らぬ他者に、ふと問いかけられる。そういうもので、ずっとそうで、これからそうだろう。わたしを取り巻いていたこの言葉が、あっけなく他者の手によって引き剥がされる。本当にそうですか？ どうしてそう思うんですか？ これからもそうなんですか？ もしくは、他者の刺激によって問いを促される。これは問題なんだっけ？ そういうものなんだっけ？ ずっとそうだったんだっけ？

本当にそれでいいんだっけ？

つい最近、ある授業で高校生たちと話していて、ひとりの学生が「そういうものだ、って言われるのがすっごくいや」と言っていた。彼女は先生にどうしてこうなるんですか、などと問うと「そういうものだから」と言われるそうだ。「わからないならわからないって言えばいいのに」と憤^ウがイする彼女は、パワフルで勇ましかった。他にどういうときに「そういうものだ」と言われる？ と問うと、彼女は「先生にわからないことを聞いたら『考えすぎるともっとわからなくなるよ』『そのうちつらくなるよ』って言われた」と眉間に皺^{しわ}を寄せた。

ああ、それは本当に腹が立って、くやしくて、絶望しただろうな、と思う。学校というものの、先生というものの、失望しただろう。

そういうものだよ、考えすぎるとつらくなるよ、わからなくなるよ。この思考停止を誘う言葉は、思^Fいやりの形をとったアドバイスの容姿をしているからおどましい。いつくしみ深い聖母の見た目をして、抱きしめられた途⁺タンにわたしたちの息の根を止めてしまう。気がついたら、あつという間に無抵抗で受け身の人間につくりかえられてしまう。

だが同時に「考えすぎるとつらくなるから、そういうものだ」と受け入れたほうがいい」という意見は、苦しみへのある種の防衛反応でもあることについても考える必要がある。哲学科に行きたい、と言った数年前、多くのひとに「考えすぎるとつらくなるよ」「世界は存在するのか、とか問わなくていいでしょ、そういうもんだ、でいいじゃん」と説得されたのを覚えている。確

かに哲学者といえ、一人で部屋にひきこもってぶつぶつ何かを口にし、どんどんおかしくなっていくイメージがまだまだ根強い。「死なないで」とお願いされたこともある。だが、わたしが実際に出会った哲学者たちはみな陽気で、よく喋り、冗談好きで、ちょっとした図々しさすらある。

なぜ考え問うことはつらくなると思われるのだろうか。確かに苦しいことも多い。いやな現実を前にして「そういうものだ」と捉えることで、自分を助けたこともある。だがそれは問いのせいというよりは、もっと別なところにあるような気もする。

皆が想像するような「問うひと」たち。彼らは顔をしかめ、頑①コなシワを眉間に刻み、ひしゃげた身体をもてあまして、苦痛に苛なぐさまれている。考えることは苦しむことだ、とでも言いたげだ。だがもしかしたらその苦しみの原因は、考えることじゃなくて、孤立にあるのかもしれない。ひとりきりで思考の海に潜っているからかもしれない。たったひとりで、たったひとつの世界観、たったひとつの価値観、たったひとつの観点で、水中を彷徨しんえんっているからかもしれない。ひとりで水中を彷徨えば、いつかは行き詰まり、苦しくなる。そしてその苦しみを、問いの深淵しんえんさと取り違えるときもある。

だが哲学は、その構造において、他なるものを渴望している。

親戚を嫌いでもいいんじゃないですか？ とか、それってなんでなんですか、わたしは違う意見を持っています、というよう
な、他なる声が、わたしの肺に新鮮な息を送り込む。わたしを閉じ込めているこHこは、大いなる海から見ればただの一部分にすぎない。世界はもっと多様で、奇妙で、無数の他なるものが存在する。その事実は、本H当におそろしくて、そしてほっとする。

哲学は何も教えない。哲学は手を差し伸べない。ただ、異なる声を聞け、と言う。

ある夜、友だちからLINE（注3）が届いた。ひらいてメッセージを浮かび上がらせる。そこには「神が沈黙してるのはさ、うちら
が他者の声を聞かためじゃね」とあった。文章のラフさと内容がアンバランスで笑ってしまう。同意の返事をしたが、なかなか
返信がこない。あとから聞いたなら、風呂に入っていたようだった。風呂の前にするLINEじゃないだろう。

あのときわたしは10歳の彼に、先生も校長先生もおとうさんも、誰も答えがわからない、と言った。彼は、はじめて目線を下に少し落としてしばらく黙り、最後の5分だけ、哲学対話に参加した。時間が来て授業が終わり、彼は遊びに教室を飛び出していった。

世界の究極の「答え」があるとしたら、神もそれを知らなかったらいいのにな、と少しだけ思った。

〔注〕 1 哲学対話——参加者が輪になって哲学的な問いについて一緒に考えて対話をするという哲学の実践の一つ

2 ググれば——インターネットで検索をすることを意味する「ググる」にもとづく表現

3 LINE——スマートフォンなどで使用できるコミュニケーション・アプリ

問1 傍線部Aについて、これはどういう意味か。最も適切なものを次から選べ。

14

① なぜ自分は親戚を好きになることができないのかといった悩みの解決策を探すのではなく、参加者それぞれが、対話を通して、親戚を好きになることができるためにどうすればよいかを考えること

② なぜ自分は親戚を好きになることができないのかといった問題の解決策を探すのではなく、参加者それぞれが、対話を通して、親戚付き合いなどに関してそれまで自覚していなかった自分の考えを深めてゆくこと

③ なぜ自分は親戚を好きになることができないのかといった問題に悩む理由を探すのではなく、参加者それぞれが、好きになることができる親戚もいるのではないかと考え方を改めること

④ なぜ自分は親戚を好きになることができないのかといった悩みの解決策を探すのではなく、参加者それぞれが、親戚を好きになることができない自分をどうすれば変えることができるかを考えること

⑤ なぜ自分は親戚を好きになることができないのかといった問題に悩む理由を探すのではなく、参加者が意見を出し合うことで、人間関係や親戚付き合いのあるべき姿を検討すること

問2 空欄Bに入る言葉として、最も適切なものを次から選べ。

15

① 喜んで

② 勇んで

③ 味気なく

④ 苦し紛れに

⑤ 満足気に

問3 空欄Cに入る言葉として、最も適切なものを次から選べ。

16

① はらはら

② しげしげ

③ ぎらぎら

④ にやにや

⑤ きらきら

問4 傍線部Dについて、「深い絶望」とはどういうことか。最も適切なものを次から選べ。

17

① 難しい環境にいる身である自分に対して、大人は、考えることが大事だと言うが、実は大人が想定していた答えを探すことができていかどうかを試されているだけだと気づいたという絶望

② 考えることが大事だと教師に言われ、自分でも考えてみたが、なかなか答えを見つけることができず、もどかしくなっているという自分の思考能力の低さに由来する絶望

③ 考えることが大事だと教師に言われているのに、考え方を教えてくれないため自分でもうまく考えることができず、指導力の低い教師を雇っている学校に対して抱いてしまう絶望

④ 難しい環境にいる身である自分に対して、考えることが大事だと教師に言われ、自分でも実際に考えてみたにもかかわらず、環境は改善されなかったという不条理さへの絶望

⑤ 考えることが大事だと教師に言われ、自分でもそのとおりだと受け止めていたが、実はそれが教師の思い違いだったことがわかったという絶望

問5 傍線部Eには著者のどのような思いが込められていると考えられるか。最も適切なものを次から選べ。

18

① 悩んでいるのは自分だけで、他人はそこまで悩んでいないのだという、社会全体の健全さを確認したことによる安堵^{あんど}

② 哲学対話を通して考えることの大切さを広めているが、何も変わらないしこれからも変わらないだろうという無力感

③ 自分以外の人たちが示し合わせて自分を置き去りにしていることを再確認させられたことによる孤独感

④ 自分とは異なり、深刻な悩みがなさそうに思われる人たちを多く見て、自分もそうなりたいと思う憧れ

⑤ 大切ななにかを探し、手にしようとしてもうまくいかないとき、うまくいっている他人を見て感じるもどかしさ

問 6 傍線部 F について、これはどういうことか。最も適切なものを次から選べ。

19

- ① 「考えすぎるとつらくなるよ」という言葉は、表面上は相手のことを思いやっているように考えられるが、実際にはそうではなく、相手を困らせてやろうという悪意が隠れているということ
- ② そもそも何がつらいかは個人によって異なるのに、「考えすぎるとつらくなる」と根拠もなく決めつけてしまっているということ

- ③ 「考えすぎるとつらくなるよ」という言葉は、善意から発せられた助言と受け取ることができるが、助言という形だからこそ考えることを簡単にやめさせる効果をもたらす欺まんを含むということ

- ④ アドバイスというものは本来は求められたからするべきもののなのに、相手が困っていると決めつけたうえで自分で考えた対応策を提示することが親切だと本気で思っているということ

- ⑤ 「考えすぎるとつらくなるよ」という言葉は、悩んでいる相手を助ける目的で発せられた言葉だが、具体的な対処法が含まれていないため、効力が弱いのが、本人がそのことに気づいていないということ

問 7 傍線部 G の「もつと別なところにある」とは何を意味しているか。最も適切なものを次から選べ。

20

- ① 苦しさは、答えがあるかどうか定かではない問題を考えなくてはならないところにあるということ
- ② 苦しさは、考えること自体にあるのではなく、たったひとりで考えるところにあるということ
- ③ 苦しさは、つらい現実をあくまでも冷静に直視しなければならぬところにあるということ
- ④ 苦しさは、他人の力を借りるしかないことへの遠慮が拭いきれないところにあるということ
- ⑤ 苦しさは、どれだけ考えても答えが出ない可能性が常にあるところにあるということ

問8 傍線部Hについて、これはどういう意味か。最も適切なものを次から選べ。

21

① 自分の想像もつかない意見があるという事実には目もくらむような思いを覚えるが、世界には多様な意見があり、自分の意見もまたその一部だという安心感があるという意味

② 自分の意見が他人から批判される可能性があるということに常におびえているが、批判されるうちに慣れてくるだろうという楽観もあるという意味

③ 自分の意見を持つためには膨大な数の他人の意見を検討する必要があるという点で途方もないところがあるが、しかしそれは探求のヒントが多いという意味では有益なことでもあるという意味

④ 自分とはまったく違う意見に出くわすことには恐怖を感じるが、だからといって自分の意見に変な劣等感をもつ必要はないと自分に言い聞かせているという意味

⑤ 自分のように苦しんでいる人は自分以外にも多数いるという事実におびえてしまうが、しかしそういう人たちが自分の代わりに考えてくれるのではないかという楽観もあるという意味

問9 問題文全体を通して、著者は哲学をするうえで大切なことについてどのように捉えていると考えられるか。最も適切なものを次から選べ。

22

① たとえ孤独になったとしてもそのことを怖れずに、できるだけ自分独自の考えを練り上げるように努めること

② 答えを出すことが難しい問題について、他人の意見をなるべく受け入れながら自分の意見をつくるということ

③ 答えを一つに絞ることが難しい問題について、他人の意見に惑わされずに自分の意見にこだわること

④ 世の中の大多数の意見に馴染めない人が、できるだけ世間の常識とは異なることで気持ちを保つということ

⑤ どんなに難しい問いであっても、他人の考えを聞きながら、ともに粘り強く自分の考えを検討し続けるということ

問10 文中の二重傍線部⑦から⑩のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを次から選べ。

23

⑦ 終バン

① バン年の作品

② チェスのバン面を見る

③ 最新バンにアップデートする

④ バン歳をする

⑤ バン奏をする

24

⑧ トウ突

① トウ辛子を好む

② 選挙にトウ選する

③ 会社がトウ産する

④ トウ海地方に住む

⑤ 物価が高トウする

25

⑨ 憤ガイ

① 海ガイに移住する

② 弾ガイする

③ 平和な生ガイを送る

④ 感ガイにふける

⑤ ガイ路樹を整備する

26

⑩ 途タン

① タン任の先生

② タン期留学をする

③ 作品に感タンする

④ タン純な構造

⑤ 組織の末タン

27

⑪ 頑コ

① コ性を伸ばす

② コ張した表現

③ 申し出をコ辞する

④ 機械がコ障する

⑤ 円コを描く